

## 音楽鑑賞教室の試み

吉永 誠吾・森 恭子・横山 洋子

## Live Music Appreciation Concert

Seigo YOSHINAGA, Kyoko MORI and Yoko YOKOYAMA

(Received November 14, 1996)

## はじめに

筆者らのグループは主として小、中学校からの強い要請もあり、昭和50年代の中頃からこれらの学校において、鑑賞教材を中心としたプログラムを組み、生演奏による子供達のための音楽鑑賞教室を開催してきた。この音楽鑑賞教室が始まってすでに二十年にもなろうとしているということは、一つの歴史が築かれたといってよいであろう。そこでこの稿では、これまでの経過をふまえ、その意義を改めて問い、これからの方針を考えたい。

## I 音楽鑑賞のメディア

音楽鑑賞のメディアとしては、音声や映像をデジタル信号化する最近の技術の進歩によりその精度が非常に進歩するとともに、従来のアナログのレコードやテープに加え著しく多様化してきている。特にVTRやレーザーディスクなどの映像をともなったソフトが普及することにより、旧来の音声だけによる音楽鑑賞のやり方に比べれば、その進歩は目を見張るいきおいである。

筆者らのグループは後に述べるように公立学校、幼稚園、保育園のためのスクールコンサートや、生演奏を聞く機会の少ない地域のために出張コンサートを行ってきた。しかし、実際に私たちが演奏することと、先に述べた記録された音楽ソフトとでは基本的に異なるものがあると感じている。すでに吉永は同じ曲目の音声だけのものと映像をともなったものと生演奏ではその演奏が与える感動にはっきりした違いがあることを指摘した<sup>1)</sup>。つまり、レコードやVTRによる演奏が世界的に著名な演奏家のものであっても、無名の生演奏にはかなわないということであった。

生演奏と記録されたものの中にはコミュニケーション

ョンという点において基本的な違いがある。つまり、記録された演奏とそれを鑑賞するもの間には一方通行のコミュニケーションしか存在しないが、生演奏には演奏者と聴衆との間に生きたコミュニケーションがある。聴衆がくいいるように演奏を聞いているときは、演奏者も次第に熱がこもってくる。逆に、聴衆がさめたような、あきあきしたような表情でその演奏を聞いているときは、演奏者も熱のこもった演奏はできない。したがって、生演奏は一度として同じものはありえないが、記録されたものは聴衆の反応とは関係なく、永遠に同じものである。

それはあたかも食事をすることにきわめてよく似ている。つまり、満腹のときや、おなかの調子が悪いときは、どんなごちそうでもおいしくない。しかし、体の調子がよくて空腹のときは、たいしたごちそうでなくともおいしいものである。それと同じように、自分が大好きな音楽であっても、それを聞きたいときもあれば聞きたくないときもある。当然その曲の味わいかたには大きな差が生ずる。しかし、生演奏ではそれを越えてコミュニケーションが生じる。私たちの活動は私たち自身の演奏によって、演奏者と聴衆との間に感動のコミュニケーションを共有することにその目的があり、そのことがまた、私たちの活動のエネルギーとなっているのである。以下はその記録である。

## II 音楽鑑賞教室活動の記録

## 1 音楽鑑賞教室をはじめたきっかけ

既に、その当時の記録がないので正確なことは分からないが、昭和53年に教育学部および附属小学校の音楽科教官との懇親会の席で笠井義雄教諭、渡辺欣也教諭(当時)の方から「せっかく、ピアノ、バイオリン、声楽の若い先生方が揃われたのだから、附属小学校の子供達にぜひその演奏を聞かせて欲しい

い」との依頼があった。そこでその年度中に附属小学校音楽室で中山孝史のピアノ、森恭子の独唱、吉永誠吾のバイオリンで通常の音楽の時間に演奏した。曲目はベートーベンのエリーゼのために、モーツァルトのトルコ行進曲、ベートーベンの子供のためのメヌエットなど、鑑賞共通教材を中心としたプログラムであった。この噂は静かに広まっていき、54年3月には熊本市立五福小学校で演奏をおこなったが、ここでは、さきのメンバーに加え、吉永がメンバーを集めて活動を開始し始めていた弦楽四重奏の演奏も行っている。さらにつぎの年には笠井教諭が熊本市立健軍小学校に転出され、同校にて54年9月に演奏会を行っている。同じ年の10月には再び五福小学校で演奏しているが、この時のプログラムには弦楽合奏を加え、ビバルディ作曲、「四季」より「春」第1楽章を演奏している。

## 2 音楽鑑賞教室のこれまでの経緯

きちんとしたプログラムが残されている最初のもは昭和55年7月に行った熊本市立花園小学校のものである。ここでは次に示すように低学年と高学年に分けて演奏した。

低学年	高学年
1 うた ・小鳥の歌 ・うみ ・花(二重唱)	1 独唱 ・友達の歌 ・浜辺の歌 ・花(二重唱)
2 ピアノ独奏 ・乙女の祈り ・軍隊行進曲(連弾)	2 ピアノ独奏 ・乙女の祈り ・軍隊行進曲(連弾)
3 バイオリン独奏 ・ガボット	3 琴独奏 ・六段
4 バイオリンと 琴の二重奏 ・春の海	4 バイオリンと 琴の二重奏 ・春の海
5 琴独奏 ・さくらさくら	5 バイオリン独奏 ・ルーマニア民族舞曲
6 チェロ独奏 ・白鳥	6 チェロ独奏 ・白鳥
7 合奏 ・春	7 合奏 ・春

以上のようなプログラムであった。この時の演奏には先に挙げた3人に加え、ソプラノの横山洋子、生田流箏曲演奏家山川玉枝および熊大フィルハーモ

ニーオーケストラのメンバーが加わっている。このプログラムは手書きによるものであり、作曲者が書かれておらず、「春」の合奏は第1楽章だけであったはずである。いかにも不完全なものであった。同様のプログラムによるスクールコンサートは昭和55年7月に楠小学校、白山小学校、56年2月に出水小学校、東町小学校、池上小学校、3月に健軍小学校で行っている。56年の夏からはオーケストラのメンバーも加えて、ルロイ・アンダーソン作曲「おどる子猫」「トランペット吹きの休日」をプログラムに加えた。このプログラムでは7月に本荘小学校、城西小学校、壺川小学校、池上小学校、桜木小学校、またこれとは別のプログラムでおなじく7月に小島小学校、山鹿中学校でコンサートを行った。この中でも本荘小学校の岩山恵美子教諭(当時)が作成して児童に配ったプログラムは丁寧な説明と、とても上手な絵が書かれてあった。

57年のプログラムにはオーケストラの演奏でアイレンベルク作曲「森の水車」、ミハエリス作曲「森のかじや」を加えている。この曲は琉球大学の中村透氏にオーケストレーションを依頼した。水笛や鐘などの擬音効果を加えて面白く編曲しており、子供達もとても楽しそうに聞いていたのが印象に残っている。次に示すのは同年7月に行った城西小学校のプログラムである。このプログラムでは時間配分をじゅうぶん考慮し、子供達に飽きさせることなく演奏を聞かせることができた。

低学年	高学年
1 バイオリン独奏 ・ガボット ゴセック ・メヌエット ベートーベン	1. バイオリン独奏 ・チゴイネルワイゼン サラサーテ
2 ソプラノ独唱 ・うみ ・小鳥の歌 ・森のくまさん	2 ソプラノ独唱 ・友達讃歌 ・浜辺の歌
3 ピアノ独奏 ・子犬のワルツ ・トルコマーチ	3 ピアノ独奏 ・波を渡るパオラの 聖フランシス (二つの伝説より) リスト
4 合奏 ・プリンク・	4 合奏 ・プリンク・

ブランク・ ブランク アンダーソン ・森の水車 アイレンベルク ・森のかじや ミハリエリス	ブランク・ ブランク アンダーソン ・森の水車 アイレンベルク ・森のかじや ミハリエリス
---	---

57年には7月に熊本大学教育学部附属小学校、城西小学校、58年3月に慶徳小学校、小島小学校、健軍小学校、池上小学校で演奏を行っている。このころには、人数の多い学校では低学年と高学年に分けて演奏し、少ない学校では一つのプログラムで演奏している。また、よほど学校の規模が小さい場合には小人数の編成によるプログラムを組み演奏している。

このような活動を行っていく中で、子供達にも演奏に参加してもらいたいという希望が我々演奏者側にも、あるいは小学校の音楽担当の先生方の側にも起ってきた。その最も手っ取り早い方法は子供達がオーケストラと一緒に歌うことであろう。そのような要求に答えるために吉永は「手のひらを太陽に」や、「森のくまさん」をオーケストラにアレンジした。このようにして、コンサートの最後にはオーケストラによる伴奏で子供達の歌声を体育館いっばいに響かせて終了するという演出を試みた。さらにオーケストラの演奏曲目のレパートリーにスッペ作曲「軽騎兵」序曲、ハーパート作曲「おもちゃの行進」などを加えた。このようなプログラムによるコンサートは59年7月の高平台小学校から始まっている。次に示すのはそれぞれの年度別に音楽鑑賞教室を実施した学校である。

昭和60年度：池上小学校、山鹿小学校、城山小学校、出水南小学校、池田小学校、田迎小学校、黒髪小学校、旭志小学校、甲佐中学校

〃 61年度：桜木小学校、託麻西小学校、菊陽西小学校、楠小学校、武蔵小学校、麻生田小学校、松尾東小学校、菊陽南小学校

〃 62年度：楠小学校、出水南小学校、日吉小学校、池田小学校、松尾東小学校、天草郡松島町今津小学校、同中学校、中島小学校

〃 63年度：泉ヶ丘小学校、熊本大学教育学部附属小学校、人吉第三中学校、五木第一中学校、合志南ヶ丘小学校

平成3年度：本渡南小学校・本渡北小学校

平成3年度からは吉永は熊大フィルハーモニーオーケストラの巡回公演を担当することになったので、このあとの音楽鑑賞教室はオーケストラ演奏を切り離して小人数のメンバーで活動している。次に示すものは平成5年3月に球磨郡多良木小学校、岡原中学校で行ったプログラムである。

1	バイオリンと琴の二重奏 春の海	宮城道雄
2	ピアノ独奏 エリーゼのために 子犬のワルツ	ベートーベン ショパン
3	バイオリン独奏 チゴイネルワイゼン	サラサーテ
4	室内楽 アイネ・クライネ・ナハトムジークより第1楽章 ピアノ五重奏曲「ます」より第4楽章	モーツァルト シューベルト
5	ソプラノ独唱 浜辺の歌 やしの実 追憶 野ばら アニー・ローリー	成田為三 大中寅二 スペイン民謡 シューベルト スコットランド民謡
6	歌とアンサンブル サウンド オブ ミュージック	リチャード・ロジャーズ
7	みんなで歌おう ドレミの歌 翼を下さい 〈演奏者〉 バイオリン 琴 ピアノ ソプラノ 〃 〃 アルト 室内楽 〈司会〉	リチャード・ロジャーズ 村井邦彦 吉永誠吾 井上通代 高野雅子 高見久美子 横山洋子 村橋和子 森 恭子 熊本アカデミカ・アンサンブル 森 恭子

このようなプログラムによるコンサートは平成5年11月に高平台小学校、平成7年に三角東小学校な

どでも行っている。

### 3 その他の活動

私たちの音楽鑑賞教室は前述の公立小、中学校の他に、幼稚園、保育園、高校の文化祭、地域団体の活動にも参加してきた。この中でお世話いただいた方々に言葉に尽くせないほどの歓迎を受けた。玉名市敬愛保育園、本渡市栢宇土町にはたびたび訪問させていただいた。ちょうど栢宇土ふるさとまつりが行われており、体育館には特産物の野菜や果物が所狭しと並べられていた。その野菜や果物の中に埋もれるようにして町民の方々が私たちの演奏を食い入るように見つめながら聞いておられたのがほほえましい思い出となって残っている。また、長期療養中の入院患者のために、あるいは長期療養中の児童の音楽学習の一環として、熊本大学医学部附属病院、国立熊本病院などでも演奏した。八代市コスモエンジェルズRスタジオにおいてもたびたび演奏させていただいた。特に重度の障害を持った子供達とその保護者のために演奏した時の記憶は、いまだに強い印象となって残っている。これらの活動についてはまた別の稿で述べたい。

### 4 アンケートおよび感想の中から

いくつかの小学校からはアンケートの結果をいただいた。それによると、518名の児童のうち「面白かった」あるいは「楽しかった」と答えた児童は517名であった。また、518名中511名が「また聞きたい」と答えていた。

感想もたくさんよせていただいた。その中から児童の反応をひろってみると、

- ・演奏を生で見たのは、初めてだったから心に残った。
- ・演奏している人の顔は皆きれいで、音もきれいだった。
- ・流れるような、きれいな音楽に私は感動しました。うちのお姉ちゃんにきかせてやりたかったです。

保護者からの感想の中から、

- ・あのおてんば娘もやんちゃ坊主もピーンと背すじをのばして、真剣な眼差しで聞き入り、時々「ふーん」とうなずいたり笑ったりと、子供達の自然な表情を見ることができました。この表情を見ているだけで、このコンサートの企画は成功だなーとひしひしと感じました。

八代市立昭和小学校の園校長先生は学校通信に次のような文章をのせておられた。

「10月23日(木)10:30から12:00まで『小さい秋のコン

サート』を開きました。熊大の吉永先生を中心に4人の先生で、ピアノ独奏・バイオリン独奏・ピオラ独奏・ソプラノ独唱・二重唱・アンサンブルがあり、最後にはみんなで、小さい秋みつけた・昭和小学校校歌をプロの演奏をバックに声高らかに歌いました。10数名の保護者も農作業などの合間を見つけてご参加いただき、充実した一時を送ることが出来ました。

身を乗り出し目を輝かして聞き入る子供たち、ファミコン・テレビゲームに熱中する姿とはかなり違ったものをみることが出来ました。私は正直に言って涙が出そうになりました。老化現象のそれではなく、音楽の美しさを食い入るように聞く子供の姿に感動してしまっただけです。まだ子供達の感想をまとめてはおりませんが、きっと満足してくれたことと思います。参加されたお母さんもすばらしかったといっておられました。後略」

これらの感想は前に述べたように、演奏者と聴衆(子供達)の間に感動のコミュニケーションを共有したことの証しといえるであろう。また、私たちの活動はたびたび新聞・テレビなどのマスコミにも取り上げていただいた。写真は平成8年10月23日、昭和小学校でのコンサートのもの(翌日、熊本日日新聞掲載のもの)である。これらの感想およびマスコミの反応は私たちの活動にどれほど励みになったかしのれない。今後、私たちの活動は少しずつ形を変えて行くかもしれない。しかし、より充実した活動を継続して行きたいと考えている。



熊本日日新聞社提供

### 注

- 1) 吉永誠吾著、「音楽鑑賞におけるメディアの違いが鑑賞者のイメージにおよぼす影響」熊本大学教育学部附属教育工学センター紀要 第5号、昭和63年2月